

トリコンがLEDを使って再現した「螺灯」。赤や青、緑に輝く光は幻想的―島根県邑南町、同社



石見銀山の採掘者使用

# 螺灯 LED使い再現

発光ダイオード(LED)を製造販売するトリコン(島根県邑南町)は、江戸時代の石見銀山で採掘に従事した人が明かり用に使っていた螺灯(らどう)を、LEDを使って再現した。貝殻から浮かび上がる赤や青、緑など七色の光は幻想的で美しく、同社は石見銀山遺跡の新たな土産品として、十一月からの販売を目指している。

## 邑南の新たな土産品期待 トリコン

螺灯は、サザエの貝殻に油を入れて火をともし使用する。銀生産が盛んだった江戸時代、薄暗い間歩の中で貴重な明かりとして使われていたが、明治時代に入り、ほかの照明器具が発達すると、次第に使われなくなったという。

トリコンは主に、企業向けの電子部品などを製造しているが、今年五月に石見銀山遺跡の研究をしている松江高専(松江市)から、螺灯の商品化を打診され、開発に着手した。

商品は、サザエの貝殻の中にLEDとボタン電池、スイッチが一体となったユニット入れ、ボタン操作でLEDを点灯させる仕組み。発光色は七色あり、連続点灯で一週間は輝くと

王国まぶらとう」という商品名で、特許庁に商標登録申請した。

価格は一個千円から千五百円程度に設定する予定で、十一月の発売開始に向け、今後約二百個を

上田康志社長は「昔の人たちが、螺灯のわずかな明かりを頼りに作業していたことに思いを寄せてもらえれば、関係者と協力しながら、ヒット商品に育てたい」と話した。

同社は九月上旬、「銀製造する予定。」

商品は、サザエの貝殻の中にLEDとボタン